

第2分科会

保育者の主体的な学びと 遊び体験の充実

助言者 味園 佳奈
(鹿児島純心女子短期大学准教授)
司会者 嵯峨崎久子(指宿幼稚園)
問題提起者 内野 宏美(かつめこども園)
記録者 森 幸美(かつめこども園)
記録者 道祖田美穂(かつめこども園)
ホスト 桃蘭 智(加世田聖母幼稚園)
運営委員 朝倉 文昭(枕崎幼稚園)

【研究課題】

子どもと共に育つ保育者

【研究・研修の視点】

幼稚園教育要領等に掲げられている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、社会性・思考力・感性と表現の3つに大きく分類されると考えられる。この姿が育つためには健康な心と体が必要である。幼児期は人や物、自然との直接的な触れ合いができる遊びやそれを取り巻く環境によって培われる。そのような中で保育者の存在も環境の一因となり、見通しを持って立案した保育者から始まる活動の役割も重要であると考えられる。

本園では、「共に生き 共に育つ保育の実践」を教育目標に掲げ、具体的には子どもの「知りたい」「やってみたい」「見つけたい」という心をくすぐる保育の在り方を目指している。私たちは日々の子どもの興味・関心や子どもの育ちを優先に考え保育を行っているが、今回、子どもの現在の姿をしっかりと見つめなおし、子どもが自ら学び活動していける「質の高い保育」となりえているのか追究していきたい。

【研究計画】

◎令和4年度

「保育者の主体的な学びと遊び体験の充実」について行事を通して考える。

◎令和5年度

保育者が主体的に学び続け、子どもたちが自然の中で自らの遊びを見つけられるよう環境を整えて考える。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

本園は卒園までに保育者との愛着関係の中で生活習慣の獲得を目指し、保育者との信頼関係の中で、友だちとの関わりを通して相手を認め、協力したり、あこがれを抱いたりしながら、自分の考えを持てる子ども像を目指して、一人ひとりの思いを大切に保育に努めている。

子どもたちの体験活動には保育計画の立案、実践、そして活動を振り返り分析し、新たな課題を見つけ、また立案することを繰り返していくわけであるが、その際に不可欠なことは「子どもたちにとって主体的な遊びとなっているのだろうか」「子どもの関心事項はどのようなものなのか」子どもの立場で考え、環境を構成したり保育計画を立案したりすることである。

4・5歳児は仲間の影響を大きく受けながら心も体も育つ。今回、子どもの育ちを全職員で共有しやすい場である行事を通して、遊び体験の充実と保育者の主体的な学びを追究していきたい。

2 研究の内容

- (1) 子どもたちが主体的に考え、遊ぶための環境構成やかかわり方について研究する。
- (2) 子どもたちの活動が豊かに展開するための配慮を考える。

3 研究の方法

- (1) 子どもたちの育ちを支える保育を振り返る
- (2) 日常の保育を生かした取り組み

4 実践例

- (1) 運動会までの取り組み
- (2) ゆめおえまつりまでの取り組み

5 まとめ

- (1) ・励ましの声かけや、できるようになったことを一緒に喜び認めることで自信に繋がった。
・保育者や仲間と共に活動できる集団遊びを取り入れることで、興味の薄かった子たちが“やってみよう”という思いを抱くことができた。
・構成において、他の職員に助言をもらうことで、自分とは違う見え方に気づくことができた。
・日常の遊びからの競技内容で、子どもたちは無理なく取り組み、意欲も高まった。
- (2) ・子どもたちの言葉に耳を傾け、何に興味・関心を持っているのか考えることが活動のきっかけになった。
・専門性をもった人たちの話を聞く場の設定は、子どもや保育者の新たな関心につながった。さらに地域の方との交流の場にもなった。
・体験することで自分の感想や考えが生まれ、諸感覚が刺激され体験活動の充実につながった。

今回の研究を通して日々の計画・実践・評価・改善（P D C Aサイクル）の大切さを改めて実感した。保育計画を立案する際は、個人や職種にとどまらず様々な意見を取り入れ実践することにより保育が充実した。さらに評価という点では、仲間や保護者と共に子どもの成長を喜び、理解できたことが自己肯定につながった。これにより、意欲が出て新たな課題を見つけ取り組もうとする姿（改善）が主体性となり、これまでの保育とは違った質の高い保育となったと実感した。

6 今後の課題

- ・子どもたちの活動意欲が高まる手立てとは何なのか考えていきたい。
- ・地域の人や物にも目を向けて保育に取り入れていきたい。

【討議の柱】

- ・コロナ禍において子どもの遊びや体験が損なわれている中で、どのような工夫や見直しを行ったか意見交換する。

【質疑応答】

質問：『ゆめおえまつり』を始めたきっかけと、味噌づくりにかかった時間は？

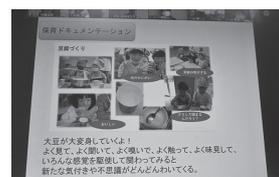
回答：きっかけは、0, 1, 2歳児にとって食事は生活の一部であり、3, 4, 5歳児は以前から植物や大根を育てていたこともあって、子どもたちに食材の生長過程や食べ物の大切さを知ってほしいとの思いからだった。本園のバスの運転手が稲作を行っており、最初の

年はお米について学び、秋に『ゆめおえまつり』を開催していたが、やがて秋だけではなく春、冬など前年度の年中児担任が子どもたちと決定した食材に合わせて実施することになった。

地域の方に来園していただき、味噌づくりについて説明を受け実際に作ってみる時間は1時間程度。『ゆめおえまつり』当日は、親子で米麴と麦を袋の中でこねる時間が15分～20分程度、持ち帰り、後日各家庭で試食した。

【グループ討議】

- ①・誕生会などの保護者が参観する際は、学年やクラスごとに分かれたり、人数の制限をしたり、保護者への検温や健康観察の依頼と、密にならないよう印をつけるなど配慮を行っている。また、後日 YouTube 配信している。
 - ・行事の変更は決してマイナスなことばかりでなく、改めて見直すことで優先することが見えてくるプラスの面もある。
- ②・戸外あそびでは、学年ごとに分かれ時間を決めたり、場所を分けたりしている。保育参観が実施できない場合は保育の様子をズームやブログで配信するなど子どもの様子を伝える工夫をしている。
- ③・コロナ禍だからではなくできることを考え、前向きに捉えながら子ども達が楽しめる活動を見つけていく。
- ④・園庭を使用する前に消毒をしたり、机、椅子も対面にならないよう固定化したりしている。トイレを使用する際も、時間をずらすなど共有する場の利用の仕方も見直した。
- ⑤・食育に関して、夏野菜や芋植え、田植えなど各園のそれぞれの取り組みについて話し合った。季節の食材を月に一度クッキングして試食したり、野菜スタンプにして製作に活用したりしている。
- ⑥・食事のとり方については、パーテーションを設置し、黙食を心掛けている。黙食をすることで、集中し残食が減った。
 - ・コロナ禍だからではなく、実施するために柔軟に対応することが大切である。時間短縮や環境設定において見直しを行い、保護者に子どもの様子を知ってもらうための工夫も行っている。



ドキュメンテーション

【助言者のまとめ】

助言者：味園 佳奈先生

(鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻准教授)

- ① なぜ体験が重視されるのか
幼児期は、遊びを中心とする生活を通して様々なことを学んでいく生活の中で、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的経験を通して成長していく。子どもたちの「これ何かな」「不思議だな」という興味から出発し、環境に主体的に関わりながら様々な活動が展開され多くのことを学んでいく。例えば、クロガネモチの葉の裏に何か不思議なものを見つけたとする。「何だろう」「虫みたい」「背中が破れてる」といった気づきから図鑑やタブレットを使って調べたり、友だちと一緒にこの不思議なものを集めたりする中で「不思議なもの

はセミの抜け殻だったのか！」「セミの種類によって抜け殻には特徴があるんだ！」などといったその子なりの科学的なものの見方や考え方が育っていく。つまり、そこには経験と環境との相互作用があるということである。子どもたちの主体的・対話的で深い学びが実現できるように保育者は日ごろから一人一人をしっかりと受け止めて保育をしていく必要があり、日常的に教材を研究して意図的・計画的に環境構成を工夫していくことが大切である。

② 環境を通した保育とは

例えば、アサガオが大きく育っている様子を目にした子が、「私の背より大きくなったよ！」と発言した際に、その子どもが、自分の体と比べながらアサガオの成長を考えることができていると捉えられる。子どもたちが経験したことで、目に見える姿から何が育っているか、何が育ちつつあるのかを子どもの内面に目を向けて捉えることが大切である。

子どもたちが経験する際に、その対象のもつ特性を保育者がより知ることで、子どもたちの経験も広がり深まっていく。

<主体的な学びを促すもの>

- ・保育者
- ・遊びの刺激となる友だち
- ・物的環境
- ・自然や社会事象 など

子どもにとっては遊ぶこと自体が目的であり、遊びを通してそのプロセスの中に様々な学びがある。心が揺さぶられる経験がより豊かなものとなるよう環境構成を工夫したい。

行事を行うにあたっては園生活の自然の中で生活に変化や潤いを与え、子どもたちが主体的に楽しく活動できるようにすることが基本である。その行事が子どもにとってどのような意味をもつのかを考えながら、喜びや感動、達成感を味わえるような場にする必要がある。運動会を実施するにあたり、年長の子どもたちがどんなことをしたいか、どんなところをみてほしいのか話し合いをする活動があった。協同性が育ちつつあるこの時期に、子どもたちが主体的に取り組める一つの工夫ではないか。

③ 子どもの育ちをどのように受け止めるか

幼児の実態を内面的に捉え、その育ちがどのような環境との関わりで助長されてきたのかを的確に捉えることにより、自らの保育の在り方の改善に繋がる。

* 保育記録・・・その日の保育を振り返り、子どもの行動を意味づけるものであり、目に見える姿から子どもの内面を見ていく必要がある。

記録例 継続的記録・・・長期にわたって、ある子どもに焦点を当てて記録するもの
場面記録・・・保育のある場面を記録するもの

* 保育ドキュメンテーション・・・子どもの遊びを通しての気づき・言葉を記録するものであり、何を学んでいるのか、何を考えているのかを発信することができる。

⇒保育者間で記録を共有し、保育を実践していくことによって多面的に子どもの育ちを見ることができ、日々の保育をマネジメントすることに繋がる。

子どもたちが主体的・対話的で深い学びが実践できるようにしていくためには、保育者自身も、子どもとともに、主体的に深く学んでいくことが大切である